＜前回：４．隠喩・レトリック２＞

（０）聖書からの具体例（ヨハネ 6:22 ～ 59）

１．イエスは言われた。「わたしが命のパンである」。

２．「イエス＝命のパン」：字義通りの意味で理解すると、「人々」と同じ疑問を生じざるを得ない　→　解釈の葛藤による意味の生成

（１）言語の諸レベルにおける隠喩の位置

３．語－文－テキスト→ 語の記号論/ 文の意味論/ テキストの解釈学（リクール）
隠喩は文のレベルの言語現象である。テキストのレベルへ議論を拡張する。

４．経験－隠喩的象徴的言語（物語）－概念（体系・形而上学）

・ティリッヒ：『マールブルグ講義』（*Dogmatik. Marburger Vorlesung von 1925*）
「教義学とはわれわれに無制約的に関わるものについての学問的な語り（wissenschaftliche Rede）である」。

・上田閑照：西田幾多郎『善の研究』における宗教（禅）と哲学との関係（上田、1991、235-265）。

（２）旧修辞学から新しい隠喩論へ

（２－１）伝統的隠喩論とその問題性

６．新しい理論によって乗り越えられるべき古い隠喩論（ギリシアのソフィストに始まり、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスをへて、19 世紀のレトリックについての論考において終わり告げた伝統）。

を次のようにまとめている（リクール, c, 76f.）。

(1) 隠喩は比喩、すなわち命名に関わる。
(2) 隠喩は言葉の字義的意味からの逸脱による命名の延長である。
(3) 隠喩のこの逸脱の理由は類似である。
(4) 類似の機能は同じ場所で使用可能であるような言葉の字義的意味から借用された言葉の比喩的意味を代置することを根拠付けることである。
(5) 代置された意味はいかなる意味論的な革新も含まない、それゆえ、我々は、代置された比喩的意味に対する字義的言葉を回復することによって、隠喩を翻訳することができる。
(6) 隠喩は革新を認めないのであるから、それは単なる言述の装飾にすぎない。したがって、言述の情動的機能として範疇化することができる。

↓

新しい隠喩論は、隠喩を言葉のレベルにおける意味の逸脱としてではなく、文のレベルにおいて可能になる隠喩表現をめぐる複数の解釈の葛藤（相互作用）から可能になる新しい意味論的な革新の問題として捉える試みである。とくに、隠喩との関わりで伝統的に持ち出されるいわゆる「字義的意味」（literal　meaning）という考えは、本質的な問題を含んでいる。

７．レイコフ：伝統的な隠喩論の誤謬＝「日常言語は字義的であり、隠喩的でない」

「すべての日常的言語は字義的であって、隠喩的ではない。すべての主題は字義的に隠喩なしに理解可能である。字義的言語だけが、偶然的に真あるいは偽でありうる。言語の文法において使用されるすべての定義はすべて字義的であり、隠喩的ではない」。（Lakoff、1993,204）

隠喩は日常言語において重要な位置を占めているが、その表現が隠喩的であると意識されるのは、通常は隠喩的には理解されない多くの概念が存在することに基づいているので

ある。

（２－２）新しい隠喩論の試み

・新しい隠喩論は、隠喩の問題は単なる言葉の問題ではない、むしろ人間の認知や経験の構造の本質的な契機であると主張する。「隠喩は詩人だけでのものではない。それは日常言語に内在し、生、死、時といった抽象概念を把握するための主要な方法なのである」（レイコフ、1994、62）。とくに科学言語における隠喩論が示すように、隠喩は科学における発見の論理に属している。「場」「波」のイメージ

８．「源泉領域から目標領域への写像」

既知の言語表現の意味を創造的に拡張することによって、新しい概念を構成する隠喩の能力の問題。源泉領域における推論構造の形式が写像によって保存され、目標領域の推論構造を規定する現象。

・「人生は旅である」「神は父である」

・The Love-as-Journey Mapping（「愛は旅である」）

９．確かに隠喩は言語によって表現され、レトリックの中心問題である。しかし、「隠喩は単に言語の事柄ではなく、思惟と理性の事柄なのである。言語は第二次的であり、写像が第一次的なのである」（ibid.:208）。隠喩は、優れて現実の認知・認識（思想と経験の方法・あり方）に関わる問題であり、人間の日常的現実性の中心に位置するのである。

10．隠喩はそれを使用することによって目標領域のそれまで十分に認知されていなかった構造が顕わにするという機能を有するのであり、それは隠喩の発見的機能に関わる問題である。

Richards: tenor-vehicle、Black: focus-frame、Beardsley: the metaphorical twist。

新しい意味の生成を帰結する、つまり焦点となった事柄の新しい意味理解を可能にする、これが隠喩表現の核心点なのである。したがって、隠喩とは新しいものの見方の発見。新しい写像の生成。

11．リクールの関心：新しい隠喩的意味の生成（生きた隠喩・類似性の発見）

レイコフの関心：詩人によって新たに作り出された生きた隠喩とすでに辞書に編入され日常的に使用されている死んだ隠喩との共通の認知的構造。

12．Metaphor depends on a semantics of the sentence before it concerns a semantics of the word. Metaphor is only meaningful in a statement; it is a phenomenon of predication.（Ricouer, b, 77）

Metaphor proceeds from the tension between all the terms in a metaphorical statement.

the first phenomenon is not the deviation from literal or proper meaning of words, but the very functioning of predication at the level of the whole statement. What we have called a tension is not just something which occurs between the two complete interpretations of the statement. （ibid.）

Metaphorical interpretation presupposes a literal interpretation which is destroyed. Metaphorical interpretation consists in transforming a self-defeating, sudden contradiction into a meaningful contradiction. twist / shift / a semantic impertinence （78）

13．「私は命のパンである」：イエスについてのヨセフの息子（肉体と持った人間）とパンという意味の多義性ではなく、イエスについての二つの解釈・見方の衝突による意味のよじれと、それによって引き起こされる永遠の命をめぐるイエスの出来事についての新しい意味の生成である。こうして、パンとイエスの間に写像が構成され、イエスについての一連の認知が可能になるのである。

→　イエスは何者か？　たとえば。

（３）隠喩・換喩・提喩

14．隠喩（類似関係）―換喩（metonyimy、現実世界での隣接関係、空間と時間）
―提喩（synecdoche、意味世界での包含関係、類と種）

↓

これから、人間の基本的な認知構造に関わっているが、特定の宗教を特徴付ける特定の認知構造は存在するか？

ヘブライズムとヘレニズムは、換喩と隠喩の対比と重なるか。ハンデルマン。

15．瀬戸『認識のレトリック』海鳴社。

＜まとめ＞

・隠喩（レトリック）は、認知の問題である。
　自己と世界（との相関性）、そして超越的なもの。
・隠喩は、発見に関わる。新しい隠喩の試みとその成功と失敗。
　言語共同体とそこにおける受容。
・隠喩の意味と指示。文のレベルでの意味の緊張
　隠喩の最初の発見・類似の発見　→　隠喩表現の伝達・類似の発見　→　隠喩の受容

５．隠喩・レトリック３

０．隠喩論の課題：

・隠喩の意味（意味とは言語を含めて記号体系一般において存在する体系内の諸記号の相互関係（差異性、差異の体系）と解釈できる。記号（ソシュールの言い方を借りれば、シニフィエとシニフィアンからなるシーニュ）の意味は、個々の記号表現に実在的に付随しているのではなく、他の諸記号との関係性。意味の実体論から関係論へ）

・隠喩の指示（Referance/Bedeutung）

宗教言語あるいは神学的言語における隠喩の指示の問題。「隠喩的表現と特徴づけられた宗教言語が、指示を持ちうるのか、あるいはその指示対象とはいかなる実在性を有するのか」＝神学的実在論の問題。

宗教言語論あるいは聖書学、また科学言語論において、それぞれの領域に現れる隠喩表現についての強力な非実在論の存在。

（１）隠喩の指示をめぐって

１．イエスの譬え＝「神の国の譬え」（次回以降）

イエスの譬えは、キリスト教信仰者の主観的な宗教経験との関わりにおいて一種のフィクションとして意味のみがあるのであって、その指示対象の実在性など学問的な探求の対象とはなり得ない、これに対して我々はいかに答えるべきであろうか。

神の国はいかなる実在か？

↓

そもそも人間にとって現実とは実在とは何かが。近代的啓蒙的な主観客観図式を素朴に前提にした真理論や実在論、あるいはその延長上にある論理実証主義の議論は、もはや妥当性を失っており、我々は隠喩の指示と指示対象の実在性を論じる過程で実在論や真理論の問い直しを同時に行わねばならない。

２．記号体系外部とその記号との関係。指示において問題となるのは、記号が自己完結的な存在ではなく、その外部を有すること。

・日常言語：言語の指示対象の実在論の肯定は自然な態度。素朴実在論。
・文学的美的な言語使用や、宗教的な言語使用、さらには科学における理論言語についても、素朴実在論はそれぞれの言語使用の内的理由から成立が困難
　神は人間の言語表現の領域を超えている。小説はフィクションでありノンフィクションではない。美的実在は物的実在に還元できない、など。
・指示対象がいわば存在しない、あるいはその存在は重要ではない、という主張。
　・構造主義：詩的機能＝自己指示性（ヤコブソン）
　・ブルトマンの非神話論化　→　天地創造物語は宇宙物理学によって検証可能な事実を指示しているのではなく、信仰者が自らの存在と世界の存在を神との関係でどのように理解し意味づけるかを表現したものである（例えば創造の善性）。
　　実在への指示ではなく、実存的決断の呼びかけ
　　神話・世界観　　信仰・主体性
・宗教言語の非実在論は最終的に宗教言語の無意味化・無価値化を帰結。
　↓
・Paul Ricoeur, Biblical Hermeneutics, 1976.
　the metaphorical interpretation gives rise to a re-interpretation of reality itself, in spite of, and thanks to, the abolition of the reference which corresponds to the literal interpretation of the statement.（84）
　it is the function of poetic language to weaken the first-order reference of ordinary language in order to allow this second-order reference to come forth.（ibid.）
　　the relationship between metaphor and model:
　　Max Black, Mary Hesse
　the connection between a heuristic fiction and of　redescription by transference of the fiction to reality itself　（85）
　　Nelson Goodman: Reality Remade
　literal falsity consists in the misassignment of a label; metaphorical truth, in the reassignment of the same label by transference.　（87）
　Poetic language also speaks of reality, but it does so at another level than does scientific language. …… But in the very measure that this first-order reference　is abolished, another power of speaking the world is liberated, although　at another level of reality. This level is that which Husserlian phenomenology has designated as the Lebenswelt and which Heidegger has called "being-in-the-world."　（ibid.）
３．詩的隠喩や文学テキストに関してリクールが行う指示の二重性、二つの指示の区別。
・隠喩においては対象についての複数の解釈の相互作用の結果、日常言語におけるような日常的経験的実在への指示機能は中断される。意味の隠喩的歪み・よじれは、その意味に基づいて生じる指示対象の確定を不可能にする（＝第一度の指示の中断）。
・詩的あるいは宗教的な隠喩表現がこの第一度の指示の中断を条件として第二度の指示作用を発生。
・意味のよじれ→新しい意味の生成（発見）→第二度の指示
　隠喩・対象についての複数の解釈の相互作用
　→　日常言語におけるような日常的経験的実在への指示機能は中断される（＝第一度の指示の中断）。意味の隠喩的歪み・よじれ：その意味に基づいた指示対象の確定を不可能にする。

→　第一度の指示の中断を条件とした第二度の指示作用の発生。
　フィクションは現実ではないということを否定的な条件として、それ固有の世界を指示する。
詩・芸術、理念、そして宗教的実在　→　これら三者の違いは？
宗教の究極性（究極的関心）
人格の全体性＋極限

４．第二度の指示の指示対象とは、実在の日常的イメージの模倣ではなく、実在の新しい解釈・見方の開示であり、前方へと投影され再構成された実在。

５.「隠喩の指示＝第二度の指示」とすれば、隠喩についても実在との対応 ── 日常経験における実在ではないが ── を論じ、その真偽を問うことが可能になる。

６．問題：

①　意味・構造から指示の生成をどのように説明できるのか。これは人間の言葉が神の言葉になるという問題の言い換えである。

②　こうして生成した指示あるいは指示対象（テキスト世界）と我々の日常世界はどのように関係づけられるのか。

７．中断から開示へ

８.「では、リクールの言う第一度の指示から第二度の指示への中断を通した開示はどのようにして生じるのであろうか。」

詩的言語や科学言語の場合。

・科学者や詩人の与える言語表現自体の構造に求めるか
・その言語を使用する科学者や詩人の側（意図、規約の設定）に求めるか
・受容者の側に求めるか

・言語構造にせよ、言語の使用者や受容者にせよ、シュライエルマッハーが「高次の実在論」と言った場合の「高次」に対しては、いずれもそれより低い次元の実在であることには変わりがない。

・宗教的隠喩における指示が高次の実在に関わる指示機能であるとするならば、それには別の説明の可能性が考えられねばならない。

↓

神学は科学言語ばかりでなく、詩的言語との類比からも離れた独自の議論を展開するよう要求されることになる。

もしこれが不可能であるとするならば、宗教は完全に人間的な可能性に還元されることになる。

９．ティリッヒの象徴論。

・ティリッヒの象徴論の象徴概念。

４つの規定。その中の第一の規定である「指示性」は、第二の規定である「開示性」と裏表の関係にある。開示性とは象徴の意味論的機能あるいは指示性によって、それ以外の仕方では、つまり非象徴的には接近できない現実の次元が開かれ経験可能な具体的イメージにもたらされること。

・芸術の象徴、詩的隠喩。

開示とは人間の外的現実が指示されるにとどまらない。外的現実の次元の開示はそれに対応する魂の内的次元の開示を伴う。芸術作品において新たなリアリティーが開示されるのは、人間の精神にそのリアリティーを感じる能力が現実化している場合。

つまり外的現実の開示と内的魂の開示とは別々の事態ではなく、同一の出来事の両面で

ある。
・1920 年代のティリッヒの宗教哲学あるいは組織神学の用語では、
　啓示相関（Offenbarungskorrelation）。
　宗教言語における対象指示と対象開示とは一つの出来事（啓示相関）の両面をなしている。
　　↓
　宗教言語における第二度の指示の開示は、神学的には啓示論によって説明されるべき。
10．帰結
・人間的現実の構成。人間的現実は奥行き・深みを有している。理念・美・そして宗教。
　　Terry Eagleton, *Reason ,Faith and Revolution. Reflections on the God Debate*, Yale University Press,2009.（『宗教とは何か』青土社、2010 年。）
・人間の日常性自体が隠喩的構造を有するとすれば、虚構と現実の二分法も廃棄されねばならなくなる。では、真理の基準とは何か。歴史に対する文学の優位（アリストテレス）。→小坂井敏晶『神話という虚構』東京大学出版会、2002 年。

（２）批判主義（カント）から批判的実在論へ
11．宗教哲学にとっての科学哲学と意義、類似性
　宗教も科学もそれがコミットする存在の実在性を前提にする。そして、宗教と科学という人間の活動は実在する。この実在する宗教と科学とが存立するための条件を解明することが、宗教哲学と科学哲学の課題となる。この課題に適切な解答を与えうるかという点で、諸理論は優劣が判定される。
　宗教も科学も、日常性（いわゆる経験・感覚与件）の単純な延長線上には存在しない。言語論的には、第一度の指示の世界ではなく、第二度の指示の世界が問われる。
12．ギルキー：批判的実在論
Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress, 1993.

（３）ロイ・バスカーの批判的実在論
21.『科学と実在論　超越論的実在論と経験主義批判』法政大学出版局。
　（Roy Bhaskar, *A Realist Theory of Science*, Leeds Books, 1975.）
・古典的経験論（素朴実在論）と超越論的観念論（批判哲学）に対する超越論的実在論（批判的実在論）
・経験主義（暗黙の存在論、原子論的事象／表象、閉じた系、人間中心主義）は、科学的発見と実験の意味を説明できない。個人的な感覚・経験の一般化によっては、科学は成立し得ない。
15.「認識が対象に従うのか、それとも対象が認識に従うかの、二つに一つである。われわれの語りが事物の関数なのか、それとも事物がわれわれの語りの関数なのか、そのいずれかである。超越論的観念論はこのような言い回しを好んで使う。しかし、これはまやかしの二分法である。科学は一つの活動であり、思考を通じて展開される一個の自然史的過程である。つまり科学は、思考とは独立に存在する事物の本性や組成や作用様式を思考の内に表現せんとする営みなのである。」（325）
「事物はわれわれがそれをどう記述するかとはまったく無関係に存立・作用している。反面、われわれは特定の記述を通じてしか事物を認識することはできない。記述は人間の織

りなす社会という世界に属しているのに対して、対象は自然という世界に帰属する。」(326)
↓
・「経験・感覚／事象／事物」の区別　→　事物＝非経験的・超事実的
cf. カントの「物自体」
・「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようでなければならないか。」(19)
自然法則は人間が存在しない世界でも作用し続ける。
↓
・transitive（他動的）と intransitive（自動的）
科学は社会的活動であり（先行する知的活動という素材が前提となる）、知識はその産物である→哲学的社会学
知識社会学
科学は自然の実在的な構造やメカニズムといった人間存在とは独立して存在する事物と法則についての認識活動である。
・自然と科学的認識における階層性・分化
経験主義は階層性を認めない、還元主義。